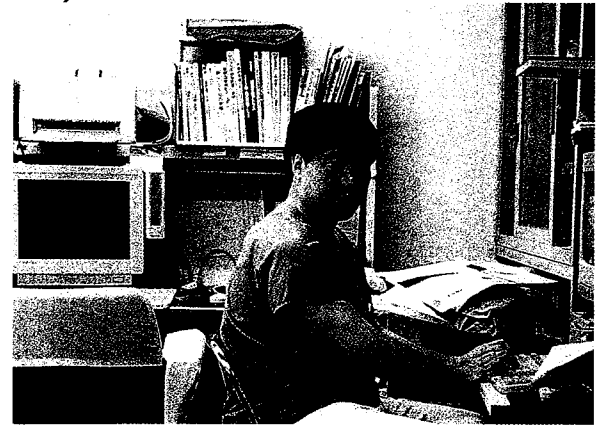


Report



小松英樹新院長

年間紹介状は一〇〇〇件を超える。

循環器内科の専門医、竹原有史医師は、折しもカロードップラーで心エコー検査中（七六歳女性、僧帽弁狭窄症の疑い）だった。

「生活上の問題（時間がマチマチ、しよっぱいものが好きなど）や加齢によつて島の人たちの有病率は比較的高いですね。糖尿病、高脂血症、高コレステロール血症、さらには虚血性心疾患、心臓弁膜症などの患者が多く、この五月に赴任して心エコー検査は三カ月ですでに一二〇件。年間では三〇〇件くらいになるでしょう。他の疾患も考慮しながら心機能をチェックしていますが、一五〜二〇分で非侵襲的にすむので患者にも負担がなく、大変有用な検査です」（竹原医師）

ペースメーカーの埋込み、経食道心エコーもこなす経験豊かな頼もしい存在の一人である。

第一線のプライマリケアに加え、こうした高度な医療も行い、より自己完結型としていく医療を、同病院の医師らは一・五次医療と呼ぶ。

さらに前号で紹介した救急医療に当たっては、九四年一月から画像伝送システムが診療支援に活躍している。現場で診断がつけにくい場合、あるいは確認して治療方針の決定などの

ために市立稚内病院などによってリアルタイムに後方支援が受けられるようになった。

脳血管疾患の頭部CT画像のほか、頭部、骨折、注腸バリウムなどのX線画像、心電図、眼底写真、皮疹のポラロイド写真など日常診療分も含めて年間およそ八〇回の発信が行われている。その主な使用メリットとして、①救急患者搬送の適否の判断、②救急搬送

地域事情によるコスト高のなか おおむね健全な経営状況を保つ

病院経営面でも地域的な特殊事情から、コスト高は避けられない。町からの繰入金で収支バランスをとっているが、おおむね健全経営で推移しているという。

ちなみに平成七年度の医業収益は九億五七〇〇万円、実質赤字は約三〇〇万円。

材料費率は五〇・九％、人件費は三八・五％に抑えられている。

「人件費率が低いのは、必要定員よりも少ない人でたくさん患者をみているためもあります。医療スタッフ一人ひとりが非常に多忙なかでみな意欲的に仕事に取り組み、結果として経営改善に寄与しているといえるでしょう」（西

の不要化による患者の身体的、精神的、経済的、時間的負担の軽減、③診療精進の向上——などをあげている。

薬剤の処方数は数年来そう大きな変化がない。しかし離島という性格上、在庫の確保は多めに必要だ。現在約二〇社のMRがおおむね月一回訪問するが、さまざまな情報が得られることや珍しいお菓子の差し入れも医師らにとって楽しみの一つのようなだ。

野徳之医師

同氏は九月末付けで転任した。代わって新院長になった小松英樹医師は利尻島出身。

「利尻の医療レベルを引き続き保ち、住民の期待に添っていきたくと思っています。できれば内科を三人体制にしたいですね。日進月歩の医療、常に勉強が必要です。島の医療は思ったより大変ですが、それに比例してやりがいがあります」と語っている。

はるか離島のこうした地道な努力が日本の地域医療全体の底上げにもつながることが望まれるが、そのためにはマスコミの役割も大きいようだ。

また、X線撮影検査件数は年々増加。現在年間六七〇〇件あまり、一万六四〇〇枚ほどになっている。全身CTによる検査は約七五〇件で、そのうちの半数は脳血管疾患の頭部検査であった。手術件数は、脊髄麻酔以上のものが年平均二〇件ほど。人工呼吸器の稼働は年間約一〇〇日。そして他病院への